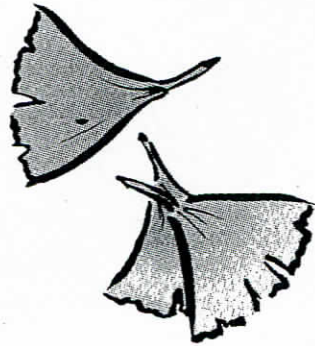


\*\*\*TENKAICHI\*\*\*

# 「天下一」について



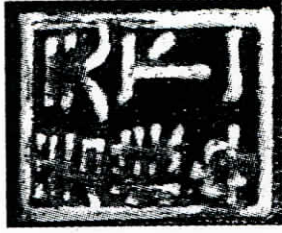
文禄2年(1593)、豊臣秀吉は朝鮮出兵の際、肥前名護屋城(佐賀県)に陣を構え、観世流、金春流の宗家を召し出し、名物面を持参させた。その際に秀吉は、山城国醍醐の角坊(光盛または光増)を召し出し、

その写し面を制作させている。角坊は10日ほどで5面を仕上げているが、「荷れが本、荷れが写し共見え分からざる」(『太閤記』)ほどの出来が優れていたため、「模面天下一」の朱印状を秀吉より授けられている(宮内庁書陵部所蔵『角坊文書』)。これが面打師における「天下一」号の最初の事例で、これ以降、角坊は「天下一若狭守」の焼印を面裏に捺すようになったと考えられている(『面目利書』)。この2年後には、出自助左衛門にも「天下一」の朱印状が秀吉より授けられ、助左衛門は後に「天下一是閑」の焼印を面裏に捺している。

その後、江戸時代に入ると出自満庸「天下一友閑」、井関家重「天下一河内」、大宮真盛「天下一大和」、出目満喬「天下一備後」、兒玉満昌「天下一近江」の5名が「天下一」を称している。これらの場合の「天下一」号の任命者をめぐっては、朝廷から地方長官に任官される際に

与えられたとして、前者の場合とは性格をやや異にするとの考え方もあるが、「天下一」号を名乗る面打師の作品は優れたものが多く、その評価は江戸時代から高かった。

明治時代以降、多くの旧大名家が経済的な理由等により、所有する能狂言面や能装束類を手放しているが、平成5年、内藤政道氏(故人)より延岡市に寄贈された内藤家旧蔵の能面6点には、「天下一」の焼印のある能面30点(「天下一若狭守」23面、「天下一是閑」2面、「天下一大和」1面、「天下一友閑」1面、「天下一備後」1面、「天下一近江」2面)が含まれており、「天下一」の焼印のある能面の所有数だけでみても、彦根藩井伊家の約20面、岡山藩池田家の約10面、ボストン美術館(米国)の13面などに比べ多く、内藤家旧蔵の能面が、全国的にも傑出した作品群であることがうかがえる。



# 延岡城下園屏風

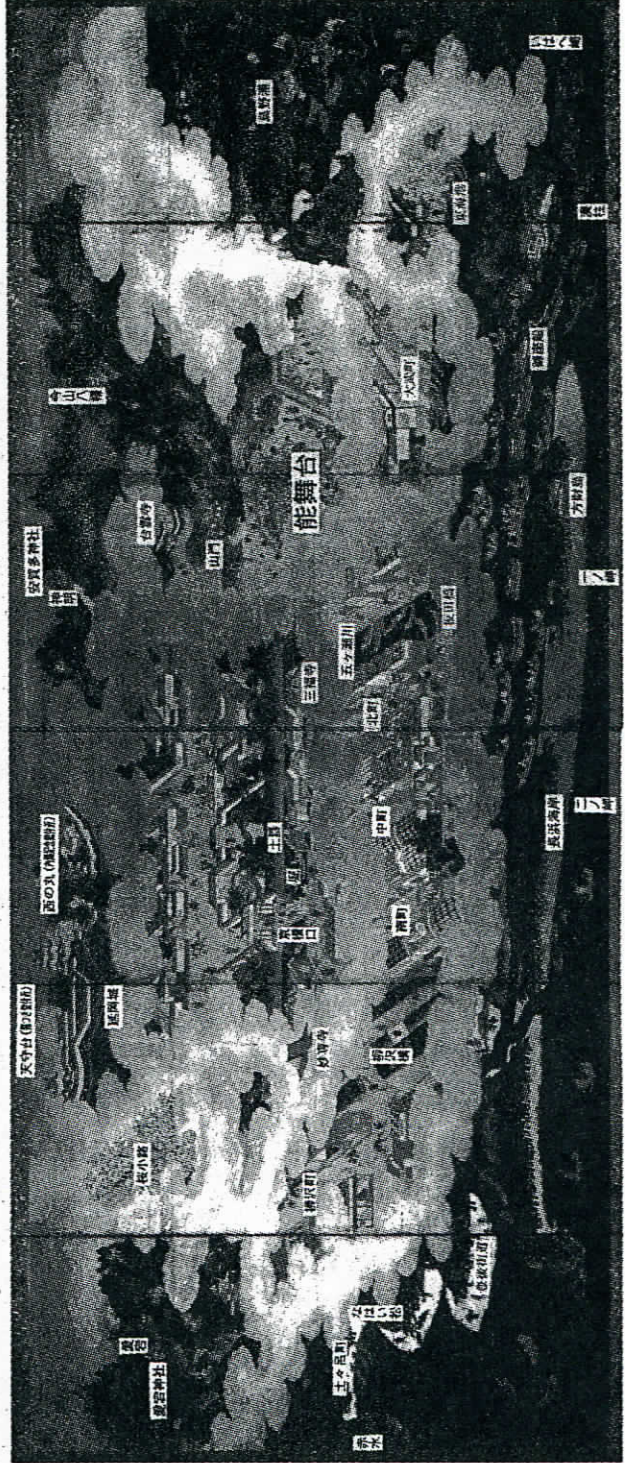
市指定有形文化財 紙本金雲着色 六曲二双  
 各縦134.0 横300.0  
 . . . . .



左 雙

日向市

門川町



右 雙

延岡市